



神奈川県三浦半島西岸から得られた 相模湾初記録のネズッポ科魚類オオクチヌメリ

永井亮羽¹・高橋麟太郎¹・尾山大知^{2,3,4}

Author & Article Info

- ¹ 麻布学園生物部（東京）
RN: ryongi0019@gmail.com (corresponding author)
² 東京大学教養学部（東京）
³ 神奈川県立生命の星・地球博物館（小田原市）
⁴ 千葉県立中央博物館（千葉市）

Received 09 October 2025
Revised 14 October 2025
Accepted 17 October 2025
Published 17 October 2025
DOI 10.34583/ichthy.60.0_30

Ryo Nagai, Rintaro Takahashi and Daichi Oyama. 2025. *Eleutherochir opercularis* collected from the west coast of Miura Peninsula, Kanagawa Prefecture, Honshu, Japan: first record from Sagami Bay. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 60: 30–35.

Abstract

In October 2024, a female specimen (65.7 mm standard length) of the Flap-gilled Dragonet *Eleutherochir opercularis* (Valenciennes, 1837) was collected from Akiya Beach (Kanagawa Prefecture), Sagami Bay, Honshu, Japan. *Eleutherochir opercularis* is widely distributed in the Indo-Pacific and has so far been recorded from Chiba, Shizuoka, Tokushima, Kochi, Oita, Miyazaki, and Kagoshima prefectures, and the Ryukyu Archipelago in Japan. Therefore, the present specimen represents the first record of *E. opercularis* from Sagami Bay.

オオクチヌメリ属 *Eleutherochir* Bleeker, 1879 はスズキ目 Perciformes ネズッポ科 Callionymidae の一群で、第1背鰭が退化傾向にあること、口が横に大きく開くこと、下唇上縁に多くの小さな肉質突起があることにより特徴付けられる (Nakabo, 1982; Fricke, 1983; 中坊・土居内, 2013). 本属は海外の文献ではオオクチヌメリ *E. opercularis* (Valenciennes, 1837) のみからなる単型属として扱われることが多い一方で (例えば, Fricke, 1983, 2002), 日本国内ではオオクチヌメリに加えてバケヌメリ *E. mirabilis* (Snyder, 1911) およびクシヒゲヌメリ *E. mccaddeni* (Fowler, 1941) も本属に含める見解が一般的である (例えば, 吉郷ほか, 2006; 中坊・土居内, 2013; 緒方・村瀬, 2019; 津野ほか, 2023; 木村・笹木, 2025; 大西, 2025). これら

のうち、オオクチヌメリは主として沿岸域の砂底に生息し、河口域など陸水の影響下にも出現する (Fricke, 1983, 2002; Nakabo, 1983; 土居ほか, 2012; 緒方・村瀬, 2022; Bataragao et al., 2023). 本種は東インド洋から西太平洋にかけての広域に分布し、国内ではこれまでに千葉県、静岡県、徳島県、高知県、宮崎県、鹿児島県本土および琉球列島から記録されているが (中坊・土居内, 2013; 犬塚ほか, 2024), 全世界で僅か 35 標本が報告されているに過ぎず、本邦では『環境省版海洋生物レッドリスト (2017)』で絶滅危惧 IA 類に指定され、生息状況の悪化が危惧されている (環境省, 2017; 木村, 2018). 本種は同属他種と誤同定される場合があり (吉郷ほか, 2006), 国内における出現状況を正確に把握するためにも、標本や写真に基づく再検証可能な出現記録の蓄積が望まれている (犬塚ほか, 2024).

2024 年 10 月、相模湾に面する神奈川県の三浦半島西岸で 1 個体のオオクチヌメリが採集された。本種はこれまでに近隣の千葉県夷隅川や静岡県駿河湾から記録されていたものの、神奈川県および相模湾では確認されておらず、今回の出現は同地域からの初記録となる。上述のとおり本種の既知の標本数が少ないだけでなく、国内での絶滅が危惧される現状も踏まえると、本事例は本種の保全上重要な知見を提供すると考えられるので、形態学的知見の蓄積のため得られた標本の形態を記載するとともに、その確認状況を併せて報告する。

材料と方法

採集調査は、2024 年 10 月 27 日に神奈川県三浦半島西岸に位置する秋谷海岸 (35°14'12.5"N, 139°36'01.0"E) において、第1および第2著者の2名が手網 (間口 36 cm, 目合 3 mm) を使用して行った。標本の作製方法は概ね本村 (2009) に準拠したが、麻酔には 2-フェノキシエタノールを使用した。標本の右体側部にてメスを用いて切開し、双眼実体顕微鏡下で生殖腺を観察した。泌尿生殖突起の観察はサイアニンプルーによる染色を施して行った。計数計測

方法は Nakabo (1982) に従い、計測はデジタルノギスを用いて 0.1 mm の精度で行った。標準体長 (standard length) は SL または体長と略記した。色彩の表記は財団法人日本色彩研究所 (1981) の系統色名に準拠した。本研究で使した標本およびその写真はそれぞれ東京大学総合研究博物館動物部門の魚類標本資料 (ZUMT) と神奈川県立生命の星・地球博物館の魚類写真資料データベース (KPM-NR) に登録した。加えて、オオクチヌメリの出現記録の整理に際しては、同データベースに登録されている写真資料を適宜参照した。なお、神奈川県立生命の星・地球博物館における資料番号はデータベース上では冒頭にゼロが付加された 7 桁の数字が使用されているが、本稿では本質的な有効数字で表記した。

Eleutherochir opercularis (Valenciennes, 1837)

オオクチヌメリ

(Figs. 1, 2)

標本 ZUMT 68706, 1 個体, 雌, 65.7 mm SL, 神奈川県横須賀市秋谷, 秋谷海岸 (相模湾), 水深 0.5 m, 2024 年 10 月 27 日, 手網, 高橋麟太郎・永井亮羽採集。

写真 KPM-NR 263006A–M: ZUMT 68706 の生鮮標本写真, 2024 年 10 月 28 日, 尾山大知撮影。

記載 標本の計数計測値を Table 1 に示す。体は頭部先端から体幹前方部にかけて縦扁し、後方に向かうにつれて側扁する。体高は腹部の第 1 背鰭第 4 棘直下で最も高くなる。また体高は低く、体長の 16.0%。頭部および体は無鱗。頭部は大きく、吻部は突出するが、眼径よりわずかに長くなる程度で短い。鼻孔はひじょうに短い鼻管の先端で開孔し、吻部の吻端と眼の前縁の中間点よりも僅かに眼に近いに位置にある。口は端位で大きく、左右に広がり、口裂は鼻孔の直下に達する。上顎先端は下顎先端よりわずかに突出する。両顎歯は小さく、上顎および下顎上に一列の小円錐歯が縫合部付近にて不規則に並ぶ。下口唇上縁には肉質状小突起が左右合わせて 16 個あり、肉質状小突起は中心付近のものが大きく、側方のものは小さい。眼は大きく、眼径は頭長の 22.7%。両眼間隔は広く、頭長の 26.1%。前鰓蓋骨棘は頭頂の 29.4% と長い。前鰓蓋棘突起は前向棘を伴わず、背側に向かってやや湾曲する 5 棘がある。鰓蓋膜は大きく後方へ伸長し、胸鰭基部を覆う。肛門には泌尿生殖突起がある (Fig. 2)。背鰭は 2 基で、第 1 背鰭は第 2 背鰭より低い。第 1 背鰭は棘条のみからなり、いずれもしなやかで第 1 棘が最も長い。第 2 背鰭は軟条のみからなり、第 1 軟条が最も短く、第 4 軟条が最も長い。第 5–7 軟条は先端付近で、最終軟条は基部付近で分枝し、他の軟条は不分枝。臀鰭起部は第 2 背鰭の第 3 軟条基部直下にあり、臀鰭は第 2 背鰭よりやや後方に位置する。臀鰭は軟条のみか

らなり、第 1 軟条が最短、第 8 軟条が最長で、最終軟条のみ分枝する。胸鰭は軟条のみからなり、第 1 軟条以外のすべての軟条が分枝する。胸鰭後端は第 2 背鰭第 4 軟条の直下に達する。腹鰭基部は前鰓蓋棘突起基部の直下に位置する。腹鰭は 1 棘 5 軟条からなり、その後端は第 1 背鰭最後端直下に達する。尾鰭は截型で、後縁はやや丸みを帯びる。尾鰭上下葉の最外縁の各 2 本の軟条は不分枝で、その他の 6 軟条は先端付近で分枝する。側線は頭部および躯幹部の境界から始まり、第 1 背鰭後端まで直進したあと、第 2 背鰭第 3 軟条下まで下降し、尾柄部まで直進する。

色彩 生鮮時 (Fig. 1) —頭部および躯幹部背面の地色は灰みのブラウンで、頭部側面および躯幹部側面上方から背面にかけて暗い灰みのブラウンの小斑が散在し、虫食い模様を成す。腹面は、頭部は金属光沢のある黄みの白で、腹鰭基点から肛門までは灰みの白、肛門より後方は明るいグレイを呈する。第 1 背鰭は黄みのブラウンで、鰭膜の外縁は暗い灰みのブラウンを呈する。第 2 背鰭の鰭条は地色が浅い黄みのブラウンで、3 本の黒色縦帯が走る。第 2 背鰭の鰭膜は透明。臀鰭の鰭条部は暗い灰みのブラウンで、外縁は白色を呈し、鰭膜は透明。胸鰭の鰭条はグレイで第

Table 1. Counts and measurements of *Eleutherochir opercularis* from Kanagawa Prefecture, Japan.

Cat. No.	ZUMT 68706
Sex	Female
Standard length (SL; mm)	65.7
Counts	
Dorsal-fin rays	IV-9
Anal-fin rays	9
Pectoral-fin rays	i+23 / i+23
Pelvic-fin rays	I, 5 / I, 5
Caudal-fin rays	ii + 6 + ii
Measurements (as % SL)	
Body width	24.1
Body depth	16.0
Caudal-peduncle depth	8.7
Pre-dorsal-fin length	39.1
Caudal-fin length	24.0
Head length	32.4
Eye diameter	7.4
Snout length	10.1
Upper-jaw length	12.3
Interorbital width	8.4
1st dorsal-fin spine length	9.5
2nd dorsal-fin spine length	8.7
3rd dorsal-fin spine length	6.9
4th dorsal-fin spine length	3.1
1st dorsal-fin ray length	10.0
Last dorsal-fin ray length	10.6
1st anal-fin ray length	8.3
Last anal-fin ray length	11.8
Pectoral-fin length	24.5
Pelvic-fin length	23.3
Preopercular spine length	6.5
Anal papilla length	0.6



Fig. 1. Lateral (top), dorsal (middle), and ventral (bottom) views of fresh specimen of *Eleutherochir opercularis* from Akiya Beach, Sagami Bay, Kanagawa Prefecture, Japan (ZUMT 68706, female, 65.7 mm SL). Photos (KPM-NR 263006C, G, L) by D. Oyama.

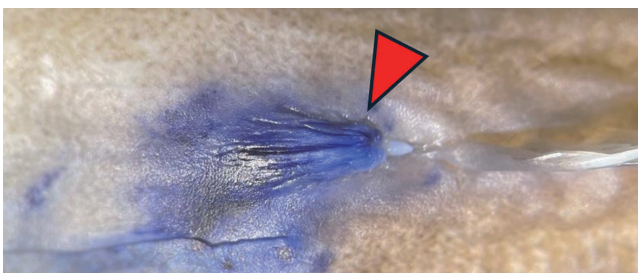


Fig. 2. Enlarged view of anal papilla of preserved specimen of *Eleutherochir opercularis* (ZUMT 68706, female, 65.7 mm SL). Arrow indicates anal papilla (temporally stained with cyanine blue).

2–12 軟条にかけて小黑点が散在し、鰭膜は半透明である。腹鰭は鰭条および鰭膜ともに暗い灰みのブラウンを呈する。尾鰭は上葉部の第 1–2 軟条がベージュ、それ以外の部分は灰みのブラウンを呈し、上葉部では小黑斑が顕著だが、下葉部では不明瞭である。尾鰭の鰭膜は透明。

分布 本種は東インド洋から西太平洋にかけて広く分布し、インド（ベンガル湾沿岸およびアンダマン・ニコバル諸島）、スリランカ、マレーシア、インドネシア、パプアニューギニア、ソロモン諸島、フィリピン、台湾、日本

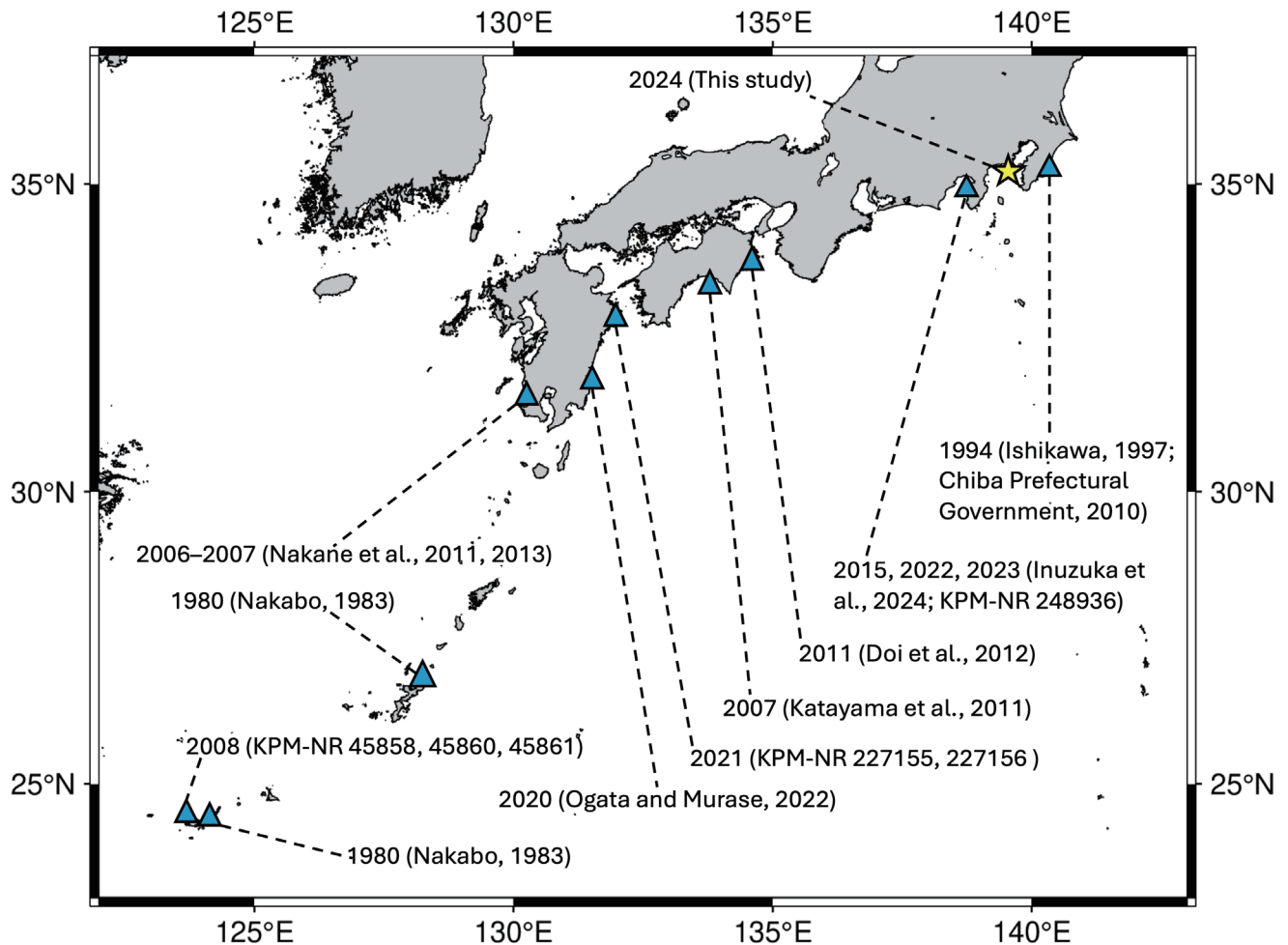


Fig. 3. Map showing distributional records (localities, collection years, and confirmations) of *Eleutherochir opercularis* in Japan. KPM-NR: Image Database of Fishes, Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.

からの記録がある (Fricke, 1983, 2001, 2002; Nakabo, 1983 ; 中坊・土居内, 2013; Yennawar. et al., 2017; Bataragoo et al., 2023; 犬塚ほか, 2024). 国内では千葉県夷隅川河口 (石川, 1997; 千葉県, 2010), 静岡県駿河湾 (犬塚ほか, 2024; KPM-NR 248936), 徳島県那賀川河口 (土居ほか, 2012), 高知県夜須川河口 (片山ほか, 2011), 宮崎県大淀川河口 (緒方・村瀬, 2022), 鹿児島県吹上浜 (Nakane et al., 2011, 2013) および琉球列島の沖縄島与那川河口 (Nakabo, 1983), 石垣島米原 (Nakabo, 1983), 西表島トウドマリ浜 (鈴木・瀬能, 2005; KPM-NR 45858, 46060, 46061) で記録されていた。また、大分県の豊後水道米水津湾では、2021年11月18日および26日に1個体ずつ本種が採集、撮影された (KPM-NR 227155, 227156)。本研究によって、相模湾に面する神奈川県三浦半島西岸の秋谷海岸から新たに記録された。

採集状況 調査標本は、秋谷海岸の南端部に位置する導流堤の際で、海中に堆積した落ち葉や枝などの間隙から採集された。採集地の底質は砂で、所々岩盤が露出していた。採集時は干潮で、水深は約0.5 mであった。採集時の水温および塩濃度は未計測だが、採集地の南側には前田川が流入しており、採集地も少なからず淡水流入

による影響を受けると考えられる。同所ではツバメコノシロ *Filistriatus plebeius* (Broussonet, 1782) およびゴンズイ *Plotosus japonicus* (Yoshino and Kishimoto, 2008), カライワシ目のレプトセファルス幼生が確認された。

備考 本研究で記載した標本は、口が横に大きく幅広いこと、上顎が下顎より突出すること、下唇上縁に多くの小さな肉質突起があること、両眼間隔 (体長の8.4%) が眼径 (体長の7.3%) より広いこと、前鰓蓋骨練の後端が鈎状ではないこと、鰓蓋上に皮弁がないこと、第1背鰭があること、第2背鰭軟条数が9であること、臀鰭軟条数が9であること、臀鰭軟条が分枝すること、尾鰭中央部の軟条の先端が分枝すること、体側の側線より腹側に皮摺がないことなどが Fricke (1983, 2001) および Nakabo (1983), 中坊・土居内 (2013) の示すオオクチヌメリ *Eleutherochir opercularis* の特徴とよく一致したため、本種と同定した。

オオクチヌメリの国内における記録状況は分布の項で述べた通りであり、過去に相模湾で記録された魚類を整理した目録 (例えば、工藤ほか, 2022; 本田ほか, 2024) でも本種は確認されていない。したがって、本報告はオオクチヌメリの相模湾および神奈川県沿岸における初記録となる。

アルコール置換後に調査標本の右体側部を切開したところ、卵巣および直径約 0.3 mm の卵母細胞が観察されたため、本標本は雌の成熟個体であると判断した。日本国内におけるオオクチヌメリの報告例のうち、性別が明らかなのは Nakabo (1983) および犬塚ほか (2024) に限られるが、これらで報告された標本はいずれも雄である。したがって、本報は国内における本種の雌の報告としては初めてとなる。なお、本標本の泌尿生殖突起長の体長に対する比率は 0.6% で、既報における国内産の雄標本での値 [1.3–1.8% (Nakabo, 1983; 犬塚ほか, 2024)] に比べ小さかった。Fricke (1983) は本種の泌尿生殖突起について、雌が雄に比べて短い性的二型があることを指摘しており、本研究で得られた計測値も同著の見解を支持するものとなった。

オオクチヌメリは 1980 年に沖縄島与那川河口および石垣島米原より得られた 2 標本に基づき日本初記録種として報告されたのち (Nakabo, 1983), 日本国内ではこれまでに千葉県夷隅川以南の各地から報告されてきた。とくに、近年は 2006–2007 年に鹿児島県吹上浜 (Nakane et al., 2011, 2013), 2007 年に高知県夜須川河口 (片山ほか, 2011), 2011 年に徳島県那賀川河口 (土居ほか, 2012), 2015 年および 2022 年, 2023 年に静岡県駿河湾 (犬塚ほか, 2024; KPM-NR 248936), 2020 年に宮崎県大淀川河口 (緒方・村瀬, 2021), 2021 年に大分県米水津湾 (KPM-NR 227155, 227156), 2024 年に神奈川県三浦半島 (本研究) と、温帯域に位置する九州本土以北での確認例が相次いでいる (Fig. 3)。近年、黒潮流域では熱帯・亜熱帯域に分布の中心を持つ熱帯・亜熱帯性魚類の温帯域への北上が示唆されており (山川ほか, 2018, 2020), その分布域からして熱帯・亜熱帯性魚類であると考えられるオオクチヌメリについても北上傾向にある可能性は十分考えられる。

しかしながら、国内におけるオオクチヌメリの報告例は少数かつ散発的であるうえ、現在の北限記録である千葉県夷隅川では 1994 年に確認されており (石川, 1997; 千葉県, 2010), この時点で少なくとも房総半島周辺まではオオクチヌメリが来遊していたと推察される。加えて、近年のインターネットをはじめとする情報技術の発達によって、情報を効率的に検索し、種やその識別点に関する情報を容易に入手可能となったことで、本種に対する認知度や関心が高まり、識者が増加した可能性も記録増加の要因として考えられる。そのため、現時点では近年の記録状況からオオクチヌメリの分布が北上傾向にあると判断することは難しい。本種が『環境省版海洋生物レッドリスト 2017』 (環境省, 2017; 木村, 2018) で絶滅危惧 IA 類 (CR) に選定され、国内における絶滅が危惧されていることも踏まえると、将来的に外部および内部形態を再検証することが可能な学術標本 (本村, 2009; 日比野, 2020) と紐づけられた記録に基づく、正確な分布・生息実態の解明が生物地

理学観点のみならず保全生物学的観点からも急務である。同時に、国内における越冬や再生産の状況を把握するために、標本の成熟状況などに関する情報も併せて蓄積されていくことが望まれる。

参照資料 オオクチヌメリ: KPM-NR 45858A–C, 沖縄県八重山郡竹富町上原, トウドウマリ浜 (琉球列島八重山諸島西表島), 2008 年 7 月 8 日, 鈴木寿之撮影; KPM-NR 46060A–B, KPM-NR 46061A–B, 撮影地および撮影者同上, 2008 年 10 月 26 日; KPM-NR 227155A–L, 大分県佐伯市米水津色利浦, 豊後水道, 米水津湾, 色宮漁港, 2021 年 11 月 18 日, 鈴木香里武撮影; KPM-NR 227156A–K, 撮影地および撮影者同上, 2021 年 11 月 27 日; KPM-NR 248936A, 静岡県沼津市下香貫, 駿河湾, 島郷海岸, 2023 年 10 月 29 日, 大井慈陽撮影。

謝 辞

本報告をとりまとめるにあたり、藍澤正宏氏 (東京大学総合研究博物館) には標本の登録に協力いただくとともに、標本観察時に有意義なご助言をいただいた。和田英敏博士 (神奈川県立生命の星・地球博物館) には魚類写真資料データベースの利用に協力いただいた。鈴木寿之博士 (大阪市立自然史博物館) には西表島におけるオオクチヌメリの確認状況についてご教示いただいた。北原佳郎氏 (株式会社環境アセスメントセンター) には文献収集に協力いただいた。麻布中学校・高等学校生物科の阿部達生教諭には原稿を校閲いただいた。Ichthy 担当編集委員の木村祐貴博士と査読者の緒方悠輝也博士には原稿に対して有意義なご意見をいただいた。ここに記して深く感謝申し上げる。

引用文献

- Bataragoa, N. E., S. B. Pratasik, F. S. I. Menajang, F. B. Manginsela, D. M. Dauhan and I. Tombi. 2023. A preliminary studies of fish richness in the Tondano River Estuary, Manado Bay. *Journal Ilmiah Platax*, 11: 473–479.
- 千葉県. 2010. 第 8 回夷隅川流域委員会. 資料 -4【夷隅川水系河川整備計画 (案) 環境編について】. 千葉県, 千葉. 44 pp. [URL](#) (7 Sept. 2025)
- 土居敏幸・佐藤陽一・尾嶋百合香・伊藤道啓・小藤美樹・三島隆伸. 2012. 徳島県的那賀川河口から採集されたオオクチヌメリ *Eleutherochir opercularis* (ネズボ科 Callionymidae). 徳島県立博物館研究報告, 22: 151–156.
- Fricke, R. 1983. Revision of the Indo-Pacific genera and species of the dragonet family Callionymidae (Teleostei). *Theses Zoologicae* 3. Verlag von J. Cramer, Braunschweig. xi + 774 pp.
- Fricke, R. 2001. Family Callionymidae, pp. 3549–3571. In Carpenter, K. E. and V. H. Niem (eds.) *FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific*, Vol. 6. Bony fishes, part 4 (Labridae to Latimeriidae). FAO, Rome.
- Fricke, R. 2002. Annotated checklist of the dragonet families Callionymidae and Draconettidae (Teleostei: Callionymoidei), with comments on callionymid fish classification. *Stuttgarter Beiträge zur Naturkunde, Serie A (Biologie)*, 645: 1–103.
- 日比野友亮. 2020. 新知見の報文を書こう 魚類編. ニッチェ・ライフ, 7: 1–4.

- 本田康介・瀬能 宏・和田英敏. 2024. 相模湾産魚類目録 (改訂). 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), 53: 127–218.
- 犬塚敦己・岸 俊樹・坂本滉太郎・高見宗広・武藤文人. 2024. 駿河湾初記録のオオクチナメ *Eleutherochir opercularis* (スズキ目: ネズッポ科). 東海自然誌, 17: 57–62.
- 石川雅朗. 1997. どう守る? 首都圏近くの豊かな川. 食の科学, 234: 24–28.
- 環境省. 2017. 【魚類】海洋生物レッドリスト (2017). [URL](#) (18 Apr. 2025).
- 片山英里・松本恭平・中村和喜・町田吉彦. 2011. オオクチナメリの四国初記録 (スズキ目ネズッポ科). 四国自然史科学研究, 6: 6–9.
- 木村清志 (編). 2018. 海産魚類レッドリストとその課題. 魚類学雑誌, 65: 97–116.
- 木村清志・笹木大地 (編). 2025. 美し国の魚たち: 三重県の魚類図鑑. 木村清志, 伊勢. 470 pp.
- 工藤孝浩・山田和彦・三井翔太・門田高太・瀬能 宏. 2022. 三浦半島南西岸魚類目録. 神奈川自然誌資料, 43: 97–142.
- 本村浩之 (編). 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- Nakabo, T. 1982. Revision of genera of the dragonets (Pisces: Callionymidae). Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 27: 77–131.
- Nakabo, T. 1983. Revision of the dragonets (Pisces: Callionymidae) found in the waters of Japan. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 27: 193–259.
- 中坊徹次・土居内 龍. 2013. ネズッポ科, pp. 1331–1345, 2106–2108. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- Nakane, Y., Y. Suda and M. Sano. 2011. Food habits of fishes on an exposed sandy beach at Fukiagehama, South-West Kyushu Island, Japan. Helgolander Marine Research, 65: 123–131.
- Nakane, Y., Y. Suda and M. Sano. 2013. Responses of fish assemblage structures to sandy beach types in Kyushu Island, southern Japan. Marine Biology, 160: 1564–1581.
- 緒方悠輝也・村瀬敦宣. 2019. 宮崎県延岡市から得られた標本に基づくネズッポ科魚類バケヌメリ *Eleutherochir mirabilis* の南限記録. 日本生物地理学会会報, 74: 65–69.
- 緒方悠輝也・村瀬敦宣. 2022. 大淀川で撮影された写真に基づく宮崎県初記録のネズッポ科魚類オオクチナメ. 宮崎の自然と環境, 7: 82–84.
- 大西 遼. 2025. 和歌山県串本町から得られた本州初記録を含むオオクチナメ属魚類2種の記録. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 56: 31–35.
- 鈴木寿之・瀬能 宏. 2005. 西表島浦内川とトゥドゥマリ浜の魚類目録 (予報), pp. 12–22. 西表島浦内川流域研究会 (編) 西表島浦内川河口域の生物多様性と伝統的自然資源利用の総合調査報告書 II. 西表島浦内川流域研究会, 西表.
- 津野義大・岡村恭平・遠藤広光. 2023. 高知県から得られた四国初記録となるネズッポ科バケヌメリ. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 38: 1–3.
- 山川宇宙・三井翔太・丸山智朗・加藤柊也・酒井 卓・瀬能 宏. 2018. 相模湾とその周辺地域の河川および沿岸域で記録された注目すべき魚類18種—近年における暖水性魚類の北上傾向について—. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), 47: 35–57.
- 山川宇宙・三井翔太・小田泰一郎・森田 優・碧木健人・丸山智朗・田中翔大・斉藤洪成・津田吉晃・瀬能 宏. 2020. 相模湾およびその周辺地域で記録された分布が北上傾向にある魚類7種. 神奈川自然誌資料, 41: 71–82.
- Yennawar, P., A. Mohapatra and P. C. Tudu. 2017. An account of ichthyofauna of Digha coast, West Bengal. Records of the Zoological Survey of India, 117: 4–21.
- 吉郷英範・太田 格・吉野哲夫. 2006. 日本初記録のネズッポ科魚類クシヒゲヌメリ (新称) *Eleutherochir mccaddeni*. 魚類学雑誌, 53: 189–193.
- 財団法人日本色彩研究所. 1981. 色名小事典. 日本色研事業株式会社, 東京. 34 + 44 pp.